

京都・文化マニフェスト

約千二百年前、民心と国家の平穩、安定、安寧を願って、都の名に「平安」の文字を刻んだ京都。平和をコンセプトに創られた都では、悠久の歴史の中で、多種多様な文化、芸術、宗教が育まれるとともに、聖徳太子以来の「和の精神」によって、それぞれが共存共栄してきました。

その「和の精神」と並んで日本人の精神の基底を成したのが、生きとし生けるものはもちろん、森羅万象、万物に至るまで靈性が宿るという思想、すなわち、万物を慈しむ心、あるいは、万物と共生する心でした。

現在、「もったいない」と言う言葉が世界で注目され始めています。地球温暖化、食料や水の枯渇などに対するキーワードと捉えられています。ここに「ありがたい」という日本人の伝統精神を新たに付加すべき時でありましょう。

この「ありがたい」は、多岐にわたる感謝と他者への崇敬の意味を持ち合わせています。

まず、一つは神佛への感謝と祈りの心です。

しかし、日本人はこれを人智を越えた存在だけではなく、人間関係にまで発展させました。「ありがたい」という言葉をもって、人間どうしが互いに尊重しつつ、認め合う「和の精神」の実践行でありました。

さらには、自然の恵みを含めた万物への感謝の言葉にまで拡大して用いてきました。例えば、都人が今もなお、「おくどさん」「へつついさん」などと、生活道具に至るまで尊称を付けて呼び慣わしていることもその証左の一つです。

すなわち、路傍に転がる石一つにも人格を持たせる感性とともに、何事も無駄にせず、「足るを知る心」から万物に感謝の念をもって生活する日本人の麗しき伝統が、現在も京都には息づいているのです。



さて、世界情勢を鑑みますと、民族紛争、温暖化など地球レベルでの難題が山積しています。

国連の最重要課題である「それぞれの国の歴史や文化に敬意を払い、その多様性を尊重する」ことは、まさに、日本人の「和の精神」「共生」を育んだ「もつたいたい」「ありがたい」の精神に集約されています。

一九九七年、地球環境と人類共存を願った「京都議定書」の理念も、日本人が培い、連綿と受け継いできたこの精神に裏付けされたものと言えますでしょう。

「もつたいたい」「ありがたい」の心を、日本、わけても、日本人のこころのふるさとである京都から発信し、これを人類共通の智慧となることを願って「京都・文化マニフェスト」として発表し、世界の国々へ伝えてゆく決意と致します。

平成二十年十二月九日

(署名) 大谷暢順

(本願寺維持財団理事長)

門川大作

(京都市長)

加賀し彦

(作家)

黒井千次

(作家)

瀬之内寂聴

(天台宗僧侶・作家)

中西進

(文学者)